

## 第35回 校長・理事長・総長管区長・司教の集い

多様性を活かす対話の文化と  
カトリック学校のアイデンティティ

### 分科会記録

2023年4月28日（金）—29日（土・祝）

日本カトリック学校教育委員会

## A グループ

---

### 1) 自己紹介を兼ねて各学校の現状報告

- ・ 女子校から 14 年前に共学化。定員 200 人で充足率 80%。150 人確保できればなんとかやっていると。青森で定員充足している私学は 0。小学校は閉めて中学を作るが、募集には苦勞している。シスターは 2 名いる。
- ・ 幼稚園 2 校を経営。手放したくないが後継者がいない。
- ・ 教頭を経験せずに昨年度より校長に就任。
- ・ カトリック学校では意味がない。カトリックとして何が出来るか、と常々考えて学校運営している。
- ・ 校長 12 年目。学院長 1 年目。女子短大の経営が非常に厳しい。都会ほど厳しい。
- ・ 中高一貫の男子校。近年は、維新の会の公立高校の改革もあり、上位の私学の募集が厳しい。本校も例に漏れず高校入試が定員を割っている。数年前まで生徒数は約 2000 人だったが、現在は約 1600 人。

### 2) カトリック学校としての存続について以下の意見がでた。

- ・ 修道会からの支援はない。学校法人として経済的に自立する必要がある。
- ・ 管理職がノンクリスチャンとなる日が近い。カトリックにこだわらない教員も多いはず。
- ・ カトリック学校ではなくなり、進学校になったケースもある。シスターはいつまでかといわれても複雑な気持ちである。
- ・ ノンクリスチャンの生徒が大半の場合は、ミサが必要なのかという気もする。
- ・ 校長は、聖書を元に生徒に語るべき。聖書に帰るしかない。
- ・ 修道会が経営を手放したあと、会員が理事会に入って助言をする学校はある。
- ・ システムチックに、後継者を育成していく必要がある。

## B グループ

---

分科会の限られた時間内で、自己紹介に加え、それぞれの所属のお話を共有、分かち合った。語られたお話の中、具体的な事柄でなく、互いの心に響きあった文言をこちらへ記録として残す。

- ・ イエズス会の学校。精神は一つ。その裏には、理事長の役割がある。共通の教育方針でまとめ、連携をとっている。若者と同伴するという意識。
- ・ 時代の流れ。修道会自体を縮小していくようにとの方針が示され、修道院が細っていき、目に見えなくなりそうな中、残していくために、この「場所」を残すことを第一に考えた。場所の大切さ。人口が減少していき、地方によっては、二極分化し、幼稚園や小学校はぐんと減る。経営が大変難しくなっていく時代。地域が違えば、話していく内容、課題、問題も違う。だから扱う法人を、地域をもとに分けた。しかし人間教育という面では分かれても同じ。
- ・ マリア会 会員 最大 130 人おいでだった。現在は 30 人を切る。全員を、学校へ派遣するのが大変難しい現実。法人の一本化の話もあるがおそらくまだ先。
- ・ カトリック校の教区立になる道。
- ・ 生徒の様子。入学式は来たが、という不登校の子が気になる。せっかく入学したのに残念。就学支援を得て、通いやすくなってはいる。そんな中、学費を支払わず卒業。大変な保護者、また経済状況の問題を抱えている方もいる。
- ・ カトリック学校としての雰囲気を出しきって募集の活動をするのが受け入れてもらいやすいのか、学校の教育方針をしめし、その中にカトリックの精神をきちんと含んでいるというのがいいのか、迷いのなかである。
- ・ 少子化の波を受けている。時代の波にのるか、のらないか。カトリックを出していくことは大事。

大学の共学化が加速度的に進む。そのなかで「女子校ってこわいよね。」という声や、共学へ憧れがあるのは事実で女子校のハードルともいえる。オープンスクールで雰囲気を感じてもらい、女子校はこわいところはないよと感じてもらう様にしている。

- ・ 不登校は右肩上がり。受け入れるというの、カトリックの使命か。経営か、はたまた理念か。この学校に来ると心が強くなる。というような。
- ・ 教員が見つからない。修道院が経営から撤退していく。シスターのあとの継承問題。どうしたら。
- ・ 公立校より4月に入職。知らないことを学べるという気持ち。世界観をみられる。それがとても幸いを感じる。
- ・ 教員が足りない。講師が足りない。20人アタックしたが。
- ・ 情報の先生が足りない。IT改革とはいうものの先生になる人員がいない。体育科の先生に2年かけて情報の免許を取ってもらった。
- ・ 新入生。自己推薦制度で入学が決まっても、公立に流れてしまう悲しさ。
- ・ 人口減少。目の前に私学経営がむずかしくなっていくことが見えている。人口の1割は外国人を迎え入れるようにするとよいのでは。
- ・ 学校の何を売りにするか。しかしそこに、働きかた改革がのしかかる。土曜日の運用難しい。

KEY Word/ 修道会 入学生確保の課題 教員募集の課題 地方の学校二極化 学校と法人

## Cグループ

---

- ・ 3校（北見藤、旭川藤星、札幌光星）で研修会を「若者」「ベテラン」に分けて実施している。初めて長崎研修旅行を実施した。
- ・ 周辺は全て共学。女子校としての本校の良さを周知させることが大切。在校生の姿・空気感を伝えたい。様々な機会に生徒が主役で、生徒の手で行事を行うよう心掛けている。公立中学の部活がなくなると苦しくなる（ダンス部によるクリスマス行事実施に当たり）教員対象「学校の軸に触れる」研修会を。カトリック校の使命を教員に知ってもらうために。
- ・ 女子校初の男性校長。カトリック教育・女子教育を継続したい。女子校のネットワーク。女子校の良さ・中等教育時代の別学の意義を発信したい。
- ・ 学校現場から修道会本部に移動。募集に苦しむ学校の現状を訴えて支えようとする機運が高まった。ミッションスクールとしての使命「すべてのいのちが守られる平和な社会実現に貢献できる人を育てる」は共学・別学とも変わらない。
- ・ 様々な選択肢があることには意味がある。「別学の良さ」を積極的にアピールしてきた。

以上、「北海道カトリック学園」の実践報告を受けて、山本先生を中心に、共学・別学の話が弾んだ。他に「寮」や「通信制」についての意見交換を行った。

## D・Eグループ

---

- ・ 福音宣教。危機感の下、長期戦略はどうか。「減っていく」というのでいいのか。
- ・ 法人に変わり12年目。経営、カトリック病院も同様。カトリック学校として今からどうするのか、残す手段を考えるべき。
- ・ 今後不要になるのか。今預かっている生徒が生き生きとできるように。
- ・ 経営までは学校、病院のPRも。
- ・ 減少を受け入れながら同意していくのか。まずは経営を回すのか。札幌光星では、聖書や宗教カラーを前面に出している。入口でどう特徴を出すのか。入学した生徒をどう福音宣教したとか。

- ・ 自己のアイデンティティを確立することから出発。
- ・ 女子校といえどもそれが特色。経営上、人が集まる。
- ・ 福岡市は公立：私立が6対4となり逆転した。
- ・ 札幌は就学支援をしており、魅力を伝えるよう工夫。
- ・ 寮を新たに作るか閉鎖するか。
- ・ 国際性を活かしてはどうか。苦労もあるがよい点も。
- ・ 司教様による支援システム作り。「日本のカトリックとしてどうサポートしていくのか」という議論が必要。
- ・ 教会がカトリック学校の宣教に力を入れていなかった。ミッションスクールがダメだというのではなく、サポート体制をどうしていくか。
- ・ 元気になる研修のテーマを希望する。

## F グループ

---

\*記録なし

## G グループ

---

- ・ まず、それぞれに自己紹介がなされたが、その中で先生方とどう関わるか、カトリック校としてのアイデンティティをどう伝えていくのかという悩みが示された。
- ・ 信者でなくてもミッションスクールに長年勤めた先生は、その価値観をお持ちだろう。
- ・ 先生方は生徒への朝礼などで聖書を引用しなくても、多様な表現でカトリックの価値観を伝えているのではないか。聖書を引用すれかどうかにこだわる必要はないのではないか。
- ・ 今週の聖句を定め、教員にも聖書に基づいて話をさせているが、それにこだわる必要はないのかもしれないと先生方の話を聞いて思った。  
→それはそれで意味ある取り組みなのではないか。
- ・ 募集で生徒・学生を集めることは大変だが、カトリック校として大事なことは、どのような生徒、学生として育ててほしいかということではないか。
- ・ 教皇フランシスコの「カトリック校は弱者を擁護する人を育てる教育をしてほしい」という言葉をしっかり受け止める必要がある。つまり、思いやり、助けの必要な人に手を貸すという愛の実践ができる人を育てることにカトリック校のアイデンティティがあるのではないか。そのためにはカトリック「で」教えることが大切であると考え。
- ・ 教育理念や指針で「愛」を打ち出しているが、「宗教教育は修道者の仕事」と自分事と捉えない先生方がいる。カトリックが少数派である日本においては、キリスト教国の学校の指針などはそのままは使えない。ただ、聖書に関しては、先生方は関心があり、反応が良い。
- ・ シスターが現場にはいなくなったが、研修などで来ていただいている。その機会を大切にしていきたい。
- ・ カトリック校の先生であるからには建学の精神に基づいて「愛」を示す人であってほしい。微笑み、あたたかい人であること、温和であることなどで愛を示す人であってほしい。
- ・ 厳しいことをいう立場の人が現場では必要である。それは、教頭である。その立場の人がそれをしてくれないと、校長が言わなくてはならなくなる。
- ・ 聖書に関してだが、信者であるから聖書について語れるだろうと言われると、私は受洗しているのに、かえってプレッシャーになる。信者であっても、精神を伝えていくのは難しい。皆、悩みながら役職を担っている。

## H グループ

---

- ・ ミッションの数が日本で適切なのかどうか。「ミッション」が社会に訴えているか。カトリック校であることの意義とは？
- ・ 生徒募集の問題はどここの学校にもある。時代の流れに沿い、カトリック校として生徒を育てる、していること（現在）は間違いないとこの二日間で確信した。
- ・ 若手からいろいろなアイデアが出てくる。全てよい。皆の良いものを集めていく。
- ・ 「多様性を活かす対話」はカトリック校の強み。人を育てるといふとき、点数で判断するのか。大きな改革が必要なのではないか。
- ・ 校則でしばられるよりも、もっと自由に生徒が様々なことをできるように。
- ・ カトリック学校は認められたからカトリック学校なのではなく、何をしているか。カリキュラムの見直しを行った。
- ・ 校則をなくした。自分で考え、自分で行動できるように。
- ・ カトリックの教えを親が学べることがカトリック校の良さ。学校として親に関わることは、カトリック校としての重要な役割。
- ・ 競争社会の中に小さい頃からいる子どもたちに、どのように相手を尊重し、命を大切にすることを学べるようにするか。
- ・ 枠組みを取り払うことが必要！

## I グループ

---

- ・ 児童数の減少に対して…一貫校にもかかわらず、途中で抜ける問題も。
- ・ 英語に特化したコース作り（ニーズ大）…ただし、何のために英語を学ぶのかは重要。
- ・ 思考力を身につけさせる学習指導、テスト。
- ・ “公立よりも丁寧な私学”だけでは子どもは集まらない。“公立よりも一人ひとりを大切にする”。
- ・ 特徴はありすぎてダメ。一つを大きく打ち出す。

## J グループ

---

- ・ 竹田先生の話からワールドユースデイの熱気と先生自身の情熱、そして若者の情熱を感じた。話を聞いてエネルギーを掻き立てられ、同時に高三宗教の切り口が定まった。
- ・ キリスト教の学校で働くアイデンティティやカトリックの学校であるために大切なことを考えさせられた。教職員の研修会の充実の必要性を感じた。  
現代の生徒にはつまずいた時に立ち返るところがカトリックであって欲しい。宗教観を持った子どもを育てたい。  
教会との結びつきが課題であると感じた。
- ・ この会のカトリック学校の存在を賭けた空気に身は引き締まる思い。  
岩手県では唯一のカトリック学校なので、存続の使命を感じている。  
WYDのような会が日本であつたらよいと思った。幼少時の日曜学校の時に感じた勢いのようなものを作り出したい。
- ・ 竹田先生のお話から、教会との結びつきを考えさせられ、印象に残った。  
2000年にローマのWYD大会に参加したが、テーマソングを歌いながら会場に入った時の熱気や輝き喜びを感じたことを思い出し、体験することの重要性を感じる。  
山本先生のお話は、キリスト教的人間観を改めて学んだ思い。豊かさの中にいて気づかないものがある。生徒の存在が素晴らしいと伝えていきたい。

教会との結びつきを強めるために、中高行事の際に小教区に呼びかけている。聖母行列やクリスマスの集いには小教区の子供たちが参加している。

- ・ 北海道カトリック学校の法人移管は、北海道出身なので興味深く見守っていた。旭川は、信徒の校長を据えないことで、新しい視点を得た。カトリック学校とは何なのかを追究できたのではないか。北見は唯一の私学として、これからが勝負だと思う。勝谷司教のお話で教区に若者がいないという話題があった。小教区を中心に考えるのではなく、インターネットの世界を考えれば可能性は広がる。若者は教会のワンピースではなく、アイデアを出して考えを広めていける存在としていかないといけない。
- ・ 「キリスト教で教える」「キリスト教を教える」という言葉が印象的だった。学校に信者は校長1人。信者ではなくても「宗教で教える」ことはできる。学校では、信者の教員でなくてもできることはあると伝えている。
- ・ 山本先生の間人観のお話を聞く中で、「揺るがない軸」を持っているのがカトリック学校なのではないかと考えた。価値観が多様化する中でカトリックの価値観という軸があること、人の幸せに対する明確な軸があるのがカトリック学校であり、自分なりの軸を持って歩んでいけるのではないかと。
- ・ 「ともに歩む」「他者のために」という言葉にカトリック学校としての意味を考えた。聖パウロ修道会が撤退したあと、カトリック学校としての自信を学校として少し失っているが、「他者のために」を目指して学校の様々なことを推進している。生徒の姿からカトリック学校であることを感じさせられることも多い。
- ・ 教員へのカトリックの学びの一つの形として、上智大学の神学部の神学講座がある。宗教科の免許を取得するためのものだけではなく、費用は学校持ちで研修出張で行かせるような形で研修として活用できる。
- ・ 生徒の中で「他者のために」「自分の与えられているものを他者のために使えることが人の幸せ」と思えるような教育は、カトリック校の軸としてあり方を示せる。海外で活躍することや探究学習も、何のためなのかをしなければ、カトリック学校の意味はないのではないかと。信者であるかないかとは異なる次元の話ではないかと。
- ・ イベントを小教区に伝えていくことの重要性を分かち合いの中で気づいた。
- ・ 修道院から小教区に出向いていかないといけないと言われるが、日曜日にミサにあずかるのは難しい。しかし、シスターの存在を小教区に見せてつながりを作ることが願いである。大学が4月から共学になった。地元では女子教育のイメージが大きいですが、違和感なく受け入れられた。
- ・ 教員は信者ではなくても聖書の話に興味を持っている。背中で教えるためにどのような雰囲気を作っていくかを考えたい。
- ・ 子どもを連れて教会に出向いていくことが必要なのではと気付いた。
- ・ 生徒は、信者ではなくても教会へ行くことで感動して帰ってくる。

## K グループ

---

\*最初に事務長の横領事件の際の大変さが分かち合われ、全体的に事務局と現場の関係や労務的問題に話が膨らんでいった。また北海道の歩みについての裏話、そこにあるカトリック学校同士の協力の話も分かち合われた。

- ・ 事務長の横領事件の際、当事者がカトリック信者であった（修道院への仮払いの名目でだれも気づかなかった）ため、一時カトリックへの不信感が生まれ、甘い緩さを突かれた感もあったが、国立大学長が事務長となり、本件がひとり一人の問題であり、教育面の問題でなかったことで助かった。見直しが進み、一致団結している。

- ・ 姉妹校の桜の聖母も元教頭が事務長に。10年ほど姉妹校（桜の聖母と明治学園）同士で法人合併をした。北九州市の学齢年齢は減少の一途。地域に根ざした理事会が必要と実感。
- ・ なくてはならない事務局であるのに軽く見ていた。事務局がしっかりしないと動かない。先生 vs 事務局ではいけない。明治学園のように交流していることは素晴らしい。
- ・ 土曜の15時まで事務局にはサービス残業当番があった。教員は知らず、多方面で互いの思い込みがあった。教員は動きまわる仕事。座ってはいけません。授業が大切。
- ・ よその学校の経験も大切と思う。
- ・ 幼小中高26年お世話になったカトリック校であるが、事務局 vs 現場が目立つ。事務局長が警察OBであり、事務局のイメージがよくない。風通しの良さが大切。何でも言える関係、お財布事情も伝えてくれるとよい。何が具体的にしんどいか見えてこないだけに、事務局との関わりが大切。ずっと33年中30年間担任、33年運動部顧問。動いてなんぼの世界から女子校校長となった（姉4人の出身校）。カトリック校ばかり。「お返しせよ」の声かと思った。2年間迷った。3月31日まで前任校、4月1日より着任とあり、切り替えが激しい春であったが、自分の力だけでない動きを感じる。
- ・ マリア会の札幌光星（共学）、暁星（男子校）・大阪明星（共学）、長崎海星（男子校）、晃華（女子）＝女子マリア会をマリアニストスクール。生徒の錬成会を取り仕切っている。若者をどうするかが課題。5つの学校より軽井沢黙想の家に全17名を集め、マリアについての話など。生徒に聴くことを大切に。テーマは若者。シノドスにしたがって若者から聴く。5つの学校をどうまとめるか、マリアニストスクールとしてどうするか。教皇の教育についての話も参照している。
- ・ 若者について。都会と地方の違いは少子化にもあり、人口減は萩と東京では状況が全く違う。萩は工夫して募集している。事務長と校長が足並みを揃えている。なくしたくないと修道会の経済的支援もしている。東京は学校の中で何を伝え、どう関わるか「同伴」が大切。メルセス会は国際教育について5大陸でグローバルコンパクトの具体的実践を話し合う。国の状況により教育の危機が異なる。コロナで3年間国際集會が出来なかった。これから若者の声を聴いてさてどうするか考えねばならない。事務局が「隅の親石」。数字が語る、数字が福音宣教をする。事務長は神経を使って「隅の親石」。どれだけありがとうと言っているか先生は評価されている。本当に信頼できるように「ありがとう」で結ばなければ。経営安全効率が大切。
- ・ 排他主義・包括主義・多元主義の山本先生のお話に共感。アイデンティティをもたねば対話は成立しないということに深く頷かされた。現場では、皆一生懸命で善意の先生方が疲弊してしまう。働き方改革が課題。
- ・ 中1は20名。激減したが、もともと2クラスサイズ。生徒も少なく先生も元気がなく、部活動はやめておこうとかでなく働きたい。働き方についてはやってなんぼの世界だった。管理職の声かけ一つが大切。日々感謝を伝える。残業に対する対価は出さねば。職免（免除）土曜の12半退勤可で、年休でなく免除。教頭が管理し、お金でないけれど早く帰す。ねぎらいのことばをかけて。
- ・ 労基に聴かれたら大変なことはしないこと。労基はアポなしにはあげないこと。あげてはいけません。札幌光星で11年事務長をやってきた。組合もあり団交もあった。変形労働時間を労使で交わす。残業手当は給料にイコール。団交、学校の事情と先生方の働き方がWin-Winになるよう心がけた。1学年360人～400人。カトリック校8校会議で出てくる。白百合・ラサール・・・。北見藤・旭川藤がなくなったら北海道のカトリックは道内拠点を失い、宣教事業体としてどうなるのか。学校法人光星学園は引き取れないか。手伝いはしようとなる。マリアニストスクールの能力を生かす。北見・旭川には教育目標がない。管理職の交流会をし、募集も光星でやっている。案内など生徒がするのは当たり前で、共にやっていく。
- ・ 校長として授業はやっている？（宗教をやっている：2名、産休など臨時の時：1名、総合学習、体験的な指導、子どもが元気になる：1名）説明会と重なり授業は出来ないが、宿泊行事の引率の時中に入らせてもらうとよい。
- ・ 北海道の裏話のような話となったが、カトリック校が助け合って力をいただいて前進している。

## L グループ

---

### 1. 自己紹介

### 2. 二日間の感想

- ・ カトリック学校 人間観がしっかりしている  
(あなたは) かけがえのない存在  
(誰かのために) 共に生きる  
(自分の) 使命
- ・ 北海道カトリック学園の法人移管の事例発表は、準備が素晴らしかった。良かった。
- ・ 本校(熊本マリスタ学園)は、1990年代発展途上国に学校をとということで、修道会が突然学校から引かれた。当時の先生方の中から管理職が出て、20年かけてミッションスクールとして、歩みなおすことができた。
- ・ 北海道は十分に準備されての法人移管。しかし、いつ何時どうなるかわからない。そう準備するか。準備の必要性を強く感じる。女子校は特に生徒の人数が減っている。
- ・ 北海道の成功例は、良かった。白百合でも今後、後継者をどうするか難しい問題である。八代白百合は田舎でしたが、スポーツ(バドミントン)が強くて、部活動が盛んで楽しかった。女子校は核となる何かを持っていなければ難しい。
- ・ 今日の講話の中で、教皇様が「教会はすべての回答をもっているわけではない。今すべてを解決できるわけでもない。」また、「耳を傾けることが大事。」と、おっしゃった。という内容が印象に残った。この傾聴ということについて、先日、本校(小学校)で母親からの申し出について話を聞いたことを思い出した。(内容:現在給食センターを建設中。これに反対する母親からの話を聞いてあげた。100点満点の答えを出すことはできないが、時間をかけて方向性をもたせてあげることができればと思う。)
- ・ キリスト教はある意味、楽観的なところがある。神様が大事にしてくれるから大丈夫。叡智を超えた計らいがある。  
先生方は信者でない方も、共感して「お祈り」「聖歌」「聖句」を唱えている。
- ・ 北海道はご苦労があったことだと思うが、できるものだなあと感心した。
- ・ 教会には若い人がいないが、学校にはいる。という言葉が印象的だった。  
上智大学では、キリスト教人間学は必修という学生と、必修選択の学生がいる。キリスト教に興味をもつ若い人たちが人生について、また、コロナ禍を経て、生と死について考える学生もいる。

## M グループ

---

### <北海道カトリック学園の講演を受けて>

- ・ シスター、神父、信者、カトリック学校出身者が減っている中で、どう使命を果たすか。どう変わっていくべきか。温度差。
- ・ 「司教の集い」(とあるが)連携における教会側の力が弱い。
- ・ 外からの人材をどう引き込んでくるか、どう育てていくか。(管理職)  
→コネクション、理事→理事長、リタイア後の信徒
- ・ 教会ではなく学校がキリストと出会う場
- ・ 地方学校における共学化、移管の問題が実際に起こってくる。
- ・ 法人合併・ネットワークが強くなる、学校外ともつながる
- ・ ほしい生徒像=あなたたちの学校  
→生徒、保護者、地域の学校/入試、学校改革、広報、スポーツ振興によって、生徒の幅が広がる。
- ・ 先の時代を見据えた取り組み/変わっていかなければならない、止まってはいけない  
→通信制(転籍可)、ICTを用いた支援、最後まで面倒をみる



- ・ ミッションをかけて生きてある。そういう方々の思いでカトリック学校がある。

## Nグループ

---

- ・ 経営・理念の両立。カトリック校の教員確保が難しい。
- ・ キリスト教を教える、キリスト教で教える人の集まりになっているか。
- ・ クリスチャン、若い先生一人で宗教科。  
北見：シスターの姿を覚えている→広がる。  
旭川：クリスチャン二人。
- ・ 数人のクリスチャンの先生、洗礼を受けていない先生方、祈り。目の前の子どもたちに神様の愛を伝えようとしているか。自分の存在価値について不信感を持っている若者が多い。目の前にいる子どもたち、あなたは大切な人だ。傷の痛みを感じ共感する。今の世の中の人たちに必要なことは何か考えて経営する。幼保連携型に変えた。
- ・ 神父6人、日本語ができない神父様。  
特別免許状：宗教/理事長1人、他5人。  
建学の精神 CEL (Christian Life Education)  
「愛と光の使徒を育てる」聖書の解説は神父様。
- ・ 高校：キリスト教だからではない。進学希望。  
幼稚園：キリスト教教育に期待。  
価値観に差がある。
- ・ 5月に新任教員の研修会(1日)。  
生徒：朝の祈り(全教員回ってくる)  
職員室：平和を求める祈り  
祈り：自分の中の弱さに目を向ける。
- ・ 「日々の祈り」
- ・ インターナショナルプリスクール、日本の幼稚園…国の違いがある。
- ・ 幼稚園から上がって来た生徒たちの中への影響は大きい。カトリック校のアイデンティティを守る。
- ・ カトリック学校の寛容さを分かち合った。

## Oグループ/オンライン

---

### カトリック教育のアイデンティティについて

- ・ 山本芳久氏の「相手の善を求める」や、「求める愛の重要性」という観点は、とても新しく感じられた。これまで司祭として「相手を大切にすること」や、「キリスト教の愛は与える愛だ」と今までは教え、語り続けてきたが、新たなアイデンティティにかかわる表現と出会ったという感覚がある。
- ・ 設立母体の精神をどのように、維持していくのかという観点を大切にしているが担い手であるシスターがいない状態の中でカトリック行事等をどのように引き継いでいくべきか難しさを感じている。
- ・ カトリック教育のアイデンティティは特別なことであるが、ある側面から考えると、それは特別なことではなく、当たり前なことを当たり前にすることができるようになることではないかと感じている。
- ・ カトリックの教えの意義を性格に伝えることを意識するとなかなか聴く耳をもってもらえない。カトリックをつきつめていくということで自分のアイデンティティがかたまり、対話できるようになるとするのは新しい視点だった。

### チーム北海道については

- ・ 桜の聖母短期大学や法人の中高小学校幼稚園においても非常に苦戦している状況にあるが、これから

のことを模索している真っ最中の中非常に参考になる。

- ・ 男女共学への刷新ということに関していえば、世界の姉妹校の幼きイエス会の学校をみると、ほとんど男女共学という形態はないので、本校のみ形態を移行することは考えづらい。そのため、ひとまずは現状で生徒募集を頑張るということを考えている。

### WYDについて

- ・ 信者の学生がいれば紹介したいが、ここ数年カトリックの信者である学生がみうけられない。だが、昨日WYDの動画を視聴して、非常にエネルギッシュな若者たちの姿をみることができ、ああいった他の学生たちの姿をみる機会があれば、自分も参加してみたいと思う学生がいると思う。
- ・ やはり体験はとても大事だと感じている。例えば、本校はクリスマス前後に募金活動をやっているが、そのときの生徒の表情がさすがに好印象を持っている。

### 来年以降に扱ってほしいテーマ

- ・ カトリックの教えについて、シンプルなメッセージや言葉で本質を失わずにどのように伝えることができるのかということについて扱ってもらえたらと思う。わかりやすいことばで語るカトリック教育や聖書のたとえ等を、現在の社会の中で、どのように語りうる例があるのかということについて、特にわかりやすい教材があると嬉しい。
- ・ キリスト教を教えることについての好例や、具体的な事例をみたい。
- ・ 学校と、学校がある地域の教会やその地域の信者とのかかわりについて、何か具体的な好例があればその具体的内容を教えてほしい。